<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>タイトル</td>
<td>〈分析性〉は理解不可能な概念なのか？記述か規範的提案か</td>
</tr>
<tr>
<td>著者</td>
<td>井頭 昌彦</td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td>項目</td>
</tr>
<tr>
<td>哲学</td>
<td>項目</td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td>項目</td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td>項目</td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td>項目</td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td>項目</td>
</tr>
</tbody>
</table>

URL: [http://hdl.handle.net/10086/23230](http://hdl.handle.net/10086/23230)
本論の主題はクワインによる分析性批判の妥当性を検討することである。カルナップ自身の分析性規定は時期に依って変化していくが、本論で扱うのは一九三〇年代後半以降の意味論的立場に立つカルナップの議論であり、そこまでの分析性概念に対するクワインの批判は、経験主義の二つのドグマ、カルナップと論理的真理由、といった論文において展開される。本論では、クワインの批判に置き換えるか分析性という概念が理解不能であるかという形で、分析性という概念が理解可能なものとする一つの道筋を提出する。

第一章「二つのドグマ」における分析性批判の論点

井頭昌彦（東北大学）
分析的説明を「論理的真理」と「同義語の置き換え」によって論理的真理に変形できるものと「二つのポイント」を分析的説明を規定するものとして「二つのポイント」の中で扱われる説明は以下であった。

「二つのポイント」の分析的説明に対するクワインの批判のポイントは、説明に用いられる「同義語」という概念自体が不明瞭である。それでは（3）はどうであろうか。クワインは、「認識論的全体論のものではなくいかなる説明も原理的に改訂を免れてはいない」として、「三つのポイント」の分析的説明がクワインとの論争の焦点ではない。

 nouvelles regulation de la phrase qui a du mal à fonctionner dans la boîte de texte. cosas que deberíamos tener en cuenta para el análisis.
らかである。それゆえ、両者の論争を扱う限りにおいて、(3)も主要な検討対象とはならない。

したがって、(2)の「意味論的規則によって真」という形での分析性規定だけが残された訳であるが、実はこれこそが分析性に対するカルナップの説明なのであり、両者の論争の焦点となるものなのである。

分析性の解明についての私の提案は常に、形式化された(構築された)言語に対して、すなわち(真理の概念)と導く、明示的な意味論的規則が特定されていっている言語に対してなされた......「分析性」の解明は、追加的なルール、本質的には意味論的(A公準)とそれに基づいたA真(私はこれを解明のためのテクニカルームとして用いる)の定義によって与えられる。

(ULT.93)

ここでいわれる「意味公準」というのは言語の意味論的規則の一部である。正確には、意味論的規則の中の変形規則の一部である。「論理学と数学の基礎」（一九三九年）は意味論的立場に移行したカルナップの最初の著作であり、意味論的規則の体系の構築過程を簡潔に説明している。本論の一つの焦点である(意味論的規則)については、カルナップの考え方に立って、卡ナップの考え方を整理しておくことにする。
カルテッジによれば、ある言語が研究される場合、研究対象である「対象言語」と研究結果が定式化される「メタ言語」が区別されねばならない。そこで、ある一群の人々が我々の理解していない言語Bを話しているとしよう。これに対して我々の日本語をメタ言語として研究を進めるのである。まず、我々は彼らの言語活動を観察し、彼らがどのような語・文を用いるか、そしてそれらの語や文がどのように使用状況の九八％においては月に対して用いられる残りの二％ではあるかを調える（語用論）。次に、この語Bの用論的観察の結果、言語Bの語Bが使用状況の九八％においては月に対して用いられる残りの二％ではあるか、それとも月だけがその指示対象であるように構築するか、我々の決定する問題である（第二の仕方で規則を構築するなら、先の二％の用法は誤りだということになる）。ここに注意しておかねばならないことは、ここでいう「意味論的規則体系の構築」が目標していることは現実に存在する言語の規則をコピーすることでは必ずしもいない。正しいか誤っているかという問題は、常に規則の体系に言及せねばならない。厳密にいえば、我々の定めようとする規則は事実的に与えられた言語Bの規則ではない。それはむしろ、意味論的体系B・Sと呼ばれるようなBに対応する言語体系を構成するものなのである。言語体系B・Sは我々によって構成されたものである。
桝井 徽
リベラル優生主義と正義
遺伝子技術と人間の福利追求の功罪を歴史・理論・倫理の観点から考察。 3150円

熊野純彦・麻生博之編
悪と暴力の倫理学
悪と暴力の多様な現象を真正面から論じ倫理の根源性を現代に問う。 2520円

宮坂和男
哲学と言語
フッサー現象学と現代の言語哲学・デリダの議論を深めた言語考察。 3990円

石崎・紀平・丸田・森田・吉永
①ポストモダル時代の倫理
人間として共に生きるための倫理のあり方を哲学的に捉え直した「人間論」入門。

石田・宮田・村上・村尾・山口隆・山口裕
②科学技术と倫理
事故や事件の背景、科学者の責任、さらには市民の関与を考える。

徳永・亀田・杉山・竹村・馬場
⑤福祉と人間の考え方
生きにくい現代社会の諸問題を理解・提言した先駆者向けの現代社会論。

ナカニシヤ出版
京都市左京区一乗寺本ノ本町15
http://www.nakanishiya.co.jp/

---

P.24

異なってくる。この場合には、以前の言語の用法に拘束されることなく、我々の望みと目的に従って自由に「言語体系」を作り直すことができるのです。

さて、意味論的規則に対するこのカルタツの考えを、分析性との関連がよりはっきりするような事例の下でどう一応描き直してみましょう。2、「緑である」ものは広がりを持つ。緑は分析的だろうか。これが分析的であるならば、少なくとも「緑である」という述語を空間的な点に適用することができる。「緑である」という述語を空間的な点に適用することはできない。なぜなら、我々は減多に空間の単一の点に適用できない。
第二章

第三節

クライオンの批判はどこに向けられているか

両者間で、言語の意味論的体系の構築というカルナップの構想が理解されたわけではない。また、このような構想のもとで提示された『意味論的規則』によって真であるというカルナップの分析的な規定に対して、クライオンはどのような批判を展開したのであろうか。まずは『二つのドグマ』における該当箇所を引用する。

……分析性は次のように派生的に特定できる。ある言明が分析的であるのは、それが（単に真であるだけではなく）意味論的規則によって説明されている句『分析性』に訴える代わりに、説明されていない句『意味論的規則』に訴えているだけである。あるクラスに属する言明が真であるとする証拠、それ自体真である言明が持つ意味論的規則と見なされる訳ではない。さなわけならばすべての真理が、意味論的規則によって真だという意味で意味論的規則を他のものから区別するのでは、『意味論的規則』という見出しのもとに現れる。indicatorの見出しそれぞれ自体は無意味なのである。（TD 34）

この節の批判の趣旨は、『分析性』という理解不能な概念を用いる際の批判である。
て説明して何もが明確になったわけではないうことである。しかし、このクワインの批判がカルナップの議論の何を問題視しているのかを十分に理解するために、カルナップの構想のどの部分にクワインの批判が適用されるのかを極めなければならない。

カルナップの構想では、意味論的規則を伴った人工言語が、人工言語の内部で探求を続ける際、体系内に新たな経験的情報を導入してきても真理値を変えることはない。このように、それが意味論的規則であるか、意味論的規則の役割は何か、といった問いは解明項を構成する人工言語体系においては明確である。なぜなら、人工言語体系はその言語の意味論的規則を指定することで定義されるのである。さて、解明項である人工言語においては、どれが意味論的規則であるかは明確である。なぜなら、人語体系においてその言語の意味論的規則を与えるとき妥当な推論とみなされるものを特定したりするものでもある。それゆえ、意味論的規則のみによって真とされる言明は、その人工言語体系においては明確に答えられる。しかし、被解明項である自然言語においては明確に答えられない。なぜなら、人工言語体系において明確であるかを経験的な仕方で特定することはできないだろう。あるいは、真である文系において明確であるが、意味論的規則であっても、我々はそれが果たす特徴的な役割が何なのかを理解できないだろう。すなわち、人工言語体系において、被解明項である自然言語の中に明確で理解可能な対応物を持たない。
第四節
意見の相違はなんですか、そして

さて、このような整理されたクライオンからの批判に対し

卡尔ナップはどのように対処するのだろうか。考えら

される対処法は以下の二つである。

1．ある言明が分析的と言えるための経験的基

準を示して、自然言語における被解明項としての分
析的言明がどのようにあるかを示することは、人工
言語体系における概念構成にとって致命的なも
のではない。そしてクライオンの批判を無効化する。

2．被解明項の不在しない不不明瞭さは解明項としての

自明言語における意味と同義性、および「クライオンの論
理的真理について…」内包概念の経験的基準」という二
つの権衡においてこの方向でクライオンに答えるとしてい
る。しかし、彼の著作の多くの箇所において「分析的言
旨の発見が見られるから、そして何より次のカルナップの
議論を考慮に入れるならば、彼の重要な見解は第二の方向
にあると考えられるべきだろう。

…私は彼の基本的なアイディア、すなわち、経験的

基準に基づいた語用論的概念が純粋意味論的な再構成
に対する被解明項として働きかかもしれないということ
を、この手続きが時々、そしておそらく現在の場
合においても、被解明項を特定する有用な方法であり
得るということを認める。その一方で私は、純粋意味
論における概念の導入を正当化するためには、語用論
외부 링크 문제 발생 중입니다.
我々の手の内でそれは、多かれ少なかれ恣意的で意図的な改訂ないし我々自身の『信念』文の追加を通じて直接的には引き起こされて、発展し変化する。それによって白く織られた灰色の伝承である。しかし私はその中に全く黒い系や全く白い系があるとする実質的な理由を見だせなかったのである。（注12）

ここでクライエスが述べているのは、父祖からの伝承を通る課題は、異なる諸体系のどれが文の織物であるかを決定することではない、それらの体系の形式を決定することができる。日常的な形式から逸脱するようなあることから導かれるのは、[[意味論的規則]]を含む文の記述の焦点を当てた分析的言明を正確に示すことができない。たとえも、我々が現在有している自然言語のなかで【規約的なもの】を見ることができない。

そこで、クライエスのシラーは、分析的・構築的なスタンスを、以下では【記述主義的スタンス】と呼ぶことにする。
さて、このようなスタンスの違いは、分析性概念の理解の可能性について（経験的基準に基づいた語用論的な被解明項）が必要か否かという点についての両者の意見の相違をどのように説明してくるのだろうか。以下ではこの点について説明する。まず、「記述主義的スタンス」に立て対応する被解明項が明確に与えられていなければならず、それらが現実にあいまって現実の言語活動の中に対応するものであるかどうかである。したがって、「記述主義的スタンス」の存在は必要でない、とするカルナップの立場が説く得力を持っているのである。

第五節 まとめと展望

本論では、まず、分析性を巡るカルナップ「クワイン論の焦点が（意味論的規則によって真）という分析性規定における事実を明らかにした。そして、分析性概念が理解可能であるために（経験的基準に基づいた語用論的な被解明項）が必要であるか否か、という点に両者の意見の相違を見るに至った上で、その意見の相違の源は（記述主義的）か（規範的）提案の差異にあるという診断を下したのである。これに対する本論の結論は「有効ではない」というものである。クワインが分析性に対して述べる不満は、意味論的
（pp. 86-7）

— ほのきのこと限りなき風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風吹き散らす風
ここでの論点は分析批判を展開する時のクワインスタンスが記述主義的だという指摘にあり、自然主義への移行への見られるようなる記述的認識論の立場が一貫して取られているということだけではない。

（9）SNを参照。また、この点に関連して、カルナップのウィン理論の問題を、解明が正当化かという観点がしばしば提示されていることなど。しかし、（9）の、meta-2で指摘されているよう。

（9）SNを参照。また、この点に関連して、カルナップのウィン理論の問題を、解明が正当化かという観点がしばしば提示されていることなど。しかし、（9）の、meta-2で指摘されているよう。

（10）SNを参照。また、この点に関連して、カルナップのウィン理論の問題を、解明が正当化かという観点がしばしば提示されていることなど。しかし、（9）の、meta-2で指摘されているよう。

（11）私見では、カルナップのウィン理論の問題を、解明が正当化かという観点がしばしば提示されていることなど。しかし、（9）の、meta-2で指摘されているような。

（10）SNを参照。また、この点に関連して、カルナップのウィン理論の問題を、解明が正当化かという観点がしばしば提示されていることなど。しかし、（9）の、meta-2で指摘されているような。

（11）私見では、カルナップのウィン理論の問題を、解明が正当化かという観点がしばしば提示されていることなど。しかし、（9）の、meta-2で指摘されているような。
Is Analyticity unintelligible?

Masahiko IGASHIRA

Carnap's epistemological program was attacked by Quine's "Two Dogmas", especially in the sense that the distinction between analytic and synthetic assumed in Carnap's epistemology is untenable. But, although it is widespread understanding that Carnap's epistemology was defeated by Quine's attack, there still remains some difficulties in understanding how Quine's criticism could succeed in getting rid of Carnap's epistemology in detail. Rather, there are some philosophers who argue that Quine's criticism is invalid, recently.

In this paper, I reevaluate the validity of Quine's criticism to analyticity, aiming at the difference of understanding the role of analyticity in epistemology. The structure of this paper is following. First, it is shown that in evaluation of Carnap/Quine dispute about analyticity it should focus on the definition of analytic sentences as truths by virtue of semantical rules. Second, it is argued that the unintelligibility charge of Quine to analyticity is applied not to explicans but to explicandum. Third, the difference between Carnap and Quine is shown to be in whether the empirically specifiable explicandum is needed or not for intelligibility of analyticity. Then, the interpretation is proposed that this difference comes from the difference in style of understanding analyticity, that is, difference between Quine's descriptive stance and Carnap's revisionary/normative stance. And, finally, I conclude that Carnap's concept of analyticity can be secured by taking Carnap's revisionary/normative stance.